

# MAX STUDY GROUP

Vol. 4 2016年3月5日

## 第4回 レポート

### A テーマ設定

今回から「グローバル」をテーマに設定します。

グローバル社会、グローバル人材、グローバル教育といったように「グローバル」という言葉が私たちに急き立てるように取り巻いています。グローバルというと国際交流とか英語に特化されがちですが、そのような限定的なとらえ方ではなく、「グローバル=今後の社会」として、よりダイナミックにとらえなくてはなりません。グローバル教育はコンテンツやプログラムそのものではなく、教育改革のビジョンであり、アプローチ、価値体系であるという意識が大切です。

この勉強会では、時代の流れ、社会の変化、人材像、教育コンセプトといったマクロの部分から、カリキュラム、授業プログラムといった実践に至るまで分けて考えていきます。単に「国際交流」の代用語としての「グローバル」ではなく、「これからの時代を生きる人材の育成」という観点から議論を深めていければ、と思います。

初回は「グローバルのバックグラウンドと未来予測」に焦点を置きます。具体的な教育活動からは離れませんが、これからの教育の意識形成、ビジョン形成という点でかけがえのないものだと思います。「なんとなくグローバル教育」ではなく、「今後の社会がどうなっていくのか、グローバル化の中でいったい何が起きているのか」、それをしっかりとらえて、その背景の中で未来の教育作りをしていければと思います。

### B プログラム

#### 1 アイスブレイキング



今回の担当は橋口先生です。

2人1組を作り、片方が自分の短所を言います。そして、もう片方がエピソードを引き出す中で、その短所に対して「でも、それって〇〇ってことだよ」とポジティブな側面としてフィードバックしてあげるとい

う活動です。例えば、「人の意見を聞き入れられない」という短所に対して「それって、自分のビジョンがしっかりあって、それをやり遂げたいという意志があるってことだよな」と返してあげる、といった要領です。

一通りアクティビティが終わった後に、橋口先生からアクティビティのデザインの裏にある目的や意図をシェアしてもらいました。このアクティビティはピアエンカウンターと呼ばれるものです。欠点という「言いづらい部分」における自己開示と、それに対してフィードバックをするカウンセリングから成り立っています。カウンセリングをする際に、会話をしながら、ポジティブなフィードバックを発見していくので、分析的談話を進めていかなければいけない、と言うことでした。

アクティビティ後、橋口先生から「このアクティビティはどのような思考スキルを求めているのでしょうか」という質問が投げかけられました。分析、再構築、など複数のスキルがあげられました。

最後に、私から「このアクティビティをより効果的にするにはどのような点をさらに工夫したらよいか」というフィードバックを全体に求めました。会場からは以下のような意見が出されました。

- ・（悩み相談など）シチュエーションを設定した方が、会話がスムーズに流れるのではないかな。
- ・ エンカウンターとしてより多くの人とペアを組みかえていくような形が良いのではないかな。
- ・ 一人あたりの時間を区切って、話を進めればよりテンポよく活動できる。

毎回ながら、会話形式のアイスブレイキングは最初はやや戸惑い、苦笑いしながらの会話ですが、やはり少しずつほぐれてくると、時間内に終わらないぐらい弾むものです。短所の話も、1 つではなく、2 つ、3 つといくらでも続けられ、自己開示が進むにつれて、会話の距離も縮まっています。とても面白いアクティビティでした。

## 2 アクティビティ: Back to the Future 1 「30 年前の世界へ伝える 2016」

今回のテーマは未来予測です。30 年後の未来を予測するということですが、その前に 30 年前の人々から今の私たちの社会はどのように映るのか、変化したのかということを考えてみます。

『Back to the Future』という映画をご存知でしょうか。USJ のアトラクションにもなった大ヒット映画なのでご存知の方が多いと思います。マイケル J. フォックス演じるマーティがデロリアンという車型タイムマシンに載ってタイムスリップをする映画です。映画の設定は

1985 年となっており、パート 1 では 30 年前の世界(1955 年)に、パート 2 では 30 年後の世界(2015 年)に、パート 3 では西部開拓時代にタイムトラベルします。2015 年 10 月 21 日には「Back to the Future の未来の日が来た(マーティがパート 2 で到着した日)」ということで、ニュースにもなりました。

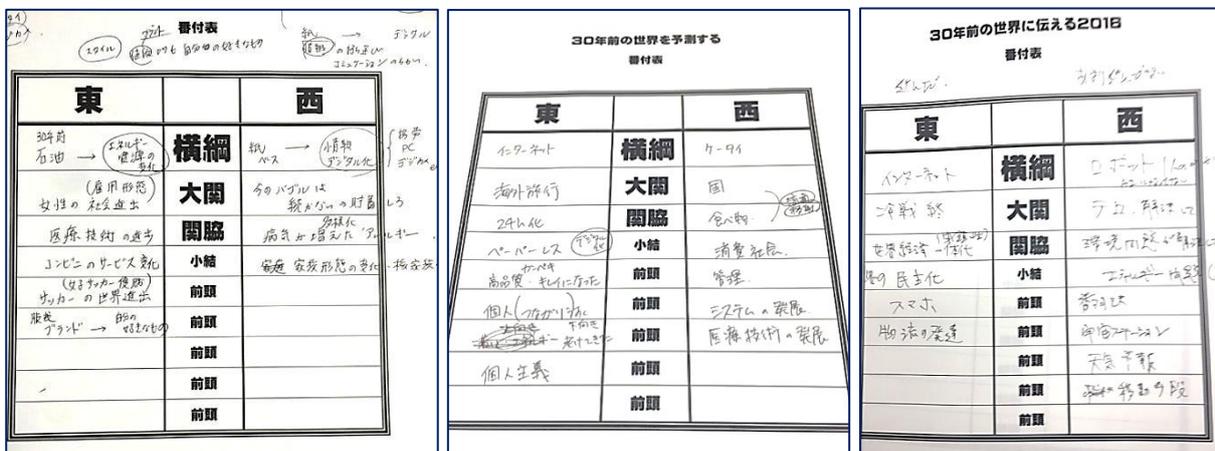


過去と未来の行き先日時

このアクティビティは「30年前の世界(1986年)にタイムトラベルしたとして、30年後のどのような未来を当時の人たちに伝えたいか、どのような未来を伝えたら驚かれるか」を考えてください、というものです。

そしてそのフォーマットは番付です。SMBCコンサルティングや日経 MJ でヒット商品番付なるものが毎年出ますが、それと同じです。ただ、商品や者だけでなく、社会変化や情勢も含めて、伝えたいものを順位付けします。

15分ぐらいを目安にしていたディスカッションですが、これがまたまとまらない。時間を延ばし、さらに議論が色々な方向に行きつつも、なんとか無理やり打ち切って、共有しました。各グループで写メを取り、LINEで共有し、グループごとにポイントをプレゼンしてもらいました。以下はその写メです。



多かった意見を私なりにカテゴリー分けすると、以下の3つでしょうか

- ① ICT化、自動化といった技術革新とそれによる生活向上  
例) コンビニの24時間化、無人自動車、スマホ
- ② 当然と思っていたものの崩壊  
例) ソ連の崩壊、バブルの崩壊
- ③ 新しいもの、商品の登場  
例) 石油から再生エネルギーへの移行

あるグループは「30年前にはもっと進んでいると思っていたのに、対して進化しなかったもの」という視点でも議論を進めていました。「Back to the Future でいろいろわくわくしたけど、車は全然空飛ばないし、、天気予報はいまだに当たらないし、小さいときに夢見ていたこともたくさん裏切られた」と文句を言っていました。



2015年、現実になったものとならなかったもの

### 3 ワークショップ 資料を読む

グローバル未来予測ではいろいろなデータが出てきますが、その話をただうのみにするのではなく、批判的かつ分析的に読めるようにしなくてはなりません。その導入の1つとして、今回のワークショップを用意しました。

クリティカルシンキングの1つとして、以下の 5 つに切りかけて資料を読み解いていきます。定義だけ読んでも分かりづらいと思いますので、実際の議論を参考にしてください。

#### ① Assumption／前提・仮定

データはいろいろな前提・仮定に基づいています。データ自体を見極める前に、このデータが予測する未来は、そもそもどのような仮定が成立していることを前提しているのかを見極める必要があります。

#### ② Fact／事実

このデータ、未来予測が成立した時、どのようなことを事実として言えるのか、ということです。事実じゃないことも自分の思考フィルターを通す中で、事実としてとらえてしまうこと、信じ切ってしまうことが山ほどあります。事実とは、「誰の目から見ても変わらない事象」と言えます。よりクリティカルに分析するためにも、自分の主観を入れずに、事実を抜き出していきます。

#### ③ Opinion／意見

事実に対して、データに対して思うことを意見とします。自分の予想、理由付け、分析的意見、などがこれに分類されます。

#### ④ Implication／導き出される推察

このデータから推察できる未来はどのようなものか。言ってしまうと結論に近いものです。

#### ⑤ Unidentified Conditions／未確定条件

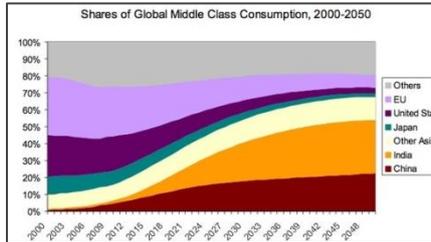
④の結論を正しいとするには、いろいろな条件や前提があります。グラフからは読み取れないものも多く、これらはとりあえず「未確定な条件」としたまま結論付け、後でリサーチをして確認する必要があります。

#### データ分析 5つの要素の例

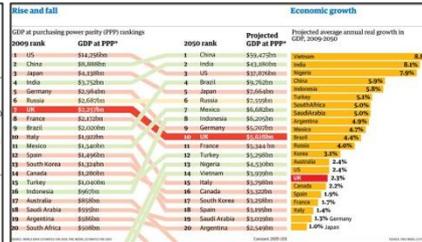
- ・ この未来予測のデータはまず 30 年後の世界も～であることが前提で成り立っている。(前提)
- ・ このデータは、～ということを示したものであり、ここから分かることは～ということである。(事実)
- ・ この数字は、思ったより～で、～という状況を反映しているからだと言える。(意見)
- ・ これらの分析から推察される未来は、～である。(導き出される推察)
- ・ この結論を出すには、人口や経済という点で、〇〇が～となるのが条件ですが、これについてはグラフからは分からず、さらにリサーチする必要があります。(未確定条件)

さて、ワークショップで実際に使ったのは以下の3つの資料です。(大きな資料は巻末に添付します。)

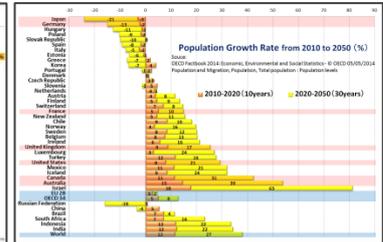
資料1



資料2



資料3



4人1組のグループに分かれて、1~3いずれかの資料を分担し、①~⑤の要素について分析していきました。なかなか慣れていないので、予定よりも多くの時間を費やして、議論を行いました。特に「前提ってなんだ？不確定条件ってなんだ？」という部分で戸惑いもあったようですが、少しずつ議論が進むようになりました。



全ての議論をここに書くのは大量になってしまうので割愛しますが、いくつかポイントとなる例だけ抽出してまとめたいと思います。

① Assumption

- EUといった組織、国の枠組みが今と同じ形で存在していることが前提。  
(ソ連の崩壊があったように、2050年には国の枠組みも変わっている可能性がある。複数国によるEU離脱の問題、イギリス、スコットランドの問題、スペインの南北問題、イスラム国など、状況が変われば世界情勢、経済も大きく変わる可能性がある。)
- 中間層の定義、貧困の定義ラインが今と同じであることが前提。  
(現在WHOは「極度の貧困」の定義を1日1.90ドルで生活している人、とあるが、これも2015年に改訂され、その前は1日1.25ドルだった。)
- 世界経済が米ドルを主体で動いていることが前提  
(アメリカの経済力、影響力ということに加え、仮想通貨ビットコインを含めた新しい経済価値感や経済活動モデルが出てくることも予想される。)

② Fact

- 中国、インドの中間層の消費シェアが増え、EU、アメリカ、日本のシェアは減少する。  
(資料1はあくまでも%なので、中間層が増えるというのはこのデータからは言えない。またEUの中間層の消費が落ち込むということも一見言えそうだが、世界の中間層全体の消費がどのくらい増えていくのかが分からないので、これも事実としては言えない。割合なのか実数なのかはしっかりと見極めなくては行けない。)
- (購買力平価をもとに見ると)イギリス経済の世界における順位が7位から10位に下がる。  
(イギリスの経済が落ち込むということは、成長率が示されているため、言えない。あくまでも他国比較の中で順位を下げるということが事実である。)

### ③ Opinion

- ・ 中国、インドの人口増加は、単に人数が増えるだけでなく、国民の生活レベルの向上を伴うの  
だろう。
- ・ イスラエルの人口増加率は、現在の中東情勢の中で疑問視してしまう。

### ④ 導き出される推察

- ・ 日本、ドイツは他の先進国と比較して、人口減少が急激に進み、経済力の維持も厳しくなる。  
難民政策を含めて、労働力の補充をどのようにとるのが重大な論点になるだろう。
- ・ インド、中国が経済の中軸の1つとなることに加え、次の成長株として東アジア、中米、アフリカ  
という国が考えられる。

### ⑤ 不確定条件

- ・ 日本、ドイツの現在の人口構成や労働人口の割合がどのように変わっていくのか。
- ・ 次の成長株として挙げた東アジア、中米、アフリカの中間層の割合がどのように増えるのか。



今回は、グローバル未来予測というより、それをテーマに資料をクリティカルに読み解くということが活動目的でした。結構頭を使い、データとにらめっこしたわけですが、逆に言うと、私たちは、普段いろいろなことを見落としてデータを解釈していたということです。

このデータ分析は、ある程度慣れると、視点が分かるようになります。現に資料 1 をやった後に、次の資料を見ると、参加者からも意見が出てくるようになりました。

今回はグローバル未来予測に突っ込んで入れなかったのが、今後、少しずつ導入をしていきたいと思えます。

## C 次回に向けて

次回はグローバル第 2 弾ということで、「グローバル人材像」をテーマに行います。その次の回では、それをテーマにしたレクシンプランをメインに進めていこうかと思っています。

## D Review and Reflection

立田先生

私は6年間一般企業に勤めてから教員になりました。もともと教員になりたいと思ってはいましたが、社会に出てからのほうが生徒に伝えられることが増えるのではないかと偉そうに考えていたのです。そんな私が今回の勉強会で学んだことを、独断と偏見もあるかもしれませんが、書かせていただきます。

### ◆アイスブレイキングについて

「相手の弱みを聞いて、その後肯定する」という設定でしたので、相手のネガティブな(黒い)ことばを拾い、その裏を探って良いことばに(白く)することが「オセロ」の感覚に似ていました。このペアワークは面白いと感じたと同時に、「これはあくまでゲームである」という感覚も大切だと感じました。

というのは、実際の会話において、相手は自分の発言を肯定も否定もしてほしくない時もあるからです。ただただ聞いてほしい。多感な時期の高校生にはそんな時もあるでしょう。新しいスキルを学ぶのは楽しいことですが、それを相手に合わせてどう使うかということが大切だと思います。大切なことは、自然な会話の中で相手(生徒)が何を求めているか優しく探ってあげることかな、と感じます。

昨年、ある研修でコーチングを学びました。直後にペアを組んで、「さあ実際にやってみてください」と言われた時のことを思い出しました。「答えは相手の中にある」という考えのもと、どんどん質問していくやり方について、私のペアとなった方が、「プレッシャーを感じる」と言ったのです。あの気づきをもたらしたのは大きかったな、と思います。相手をきちんと見て、自然な会話の中から相手も求めていることを探ってあげられるようになりたいな、と思います。

### ◆アクティビティ・グループワークについて

感じたことを2点書かせていただきます。

1つ目の「30年前の世界へ伝える 2016」では、知識として過去のことを知らないと現在との比較ができず、自分自身勉強が足りないな、と思いました。よく他の先生から「歴史を知れ」と言われます。私はこの言葉はあまり好きではありません。過去にこだわってばかりいる人によく言われるからです。しかし、「比較をする」という観点からは非常に大切なことだと改めて感じました。比較対象をたくさん持って、取捨選択をしていくスキルは教員にも生徒にも必要なことですよね。

2つ目の資料分析では、私たちのグループでは資料1「世界の中流階級の消費のシェア」について分

析しましたが、未来予測という資料の中身というより、資料の読み方について課題意識を持ちました。普段はなかなか「前提」「事実」「意見」の切り分けをできていない、と感じました。

私は一度社会に出て、「企業は数字だ」と習ってきました。偏った見方かもしれませんが、企業的な価値観では、「数字で語れない、数字の意味を理解できない、数字を疑うことのできないこと」は、「仕事ができないこと」とイコールとして言われていることも事実です。

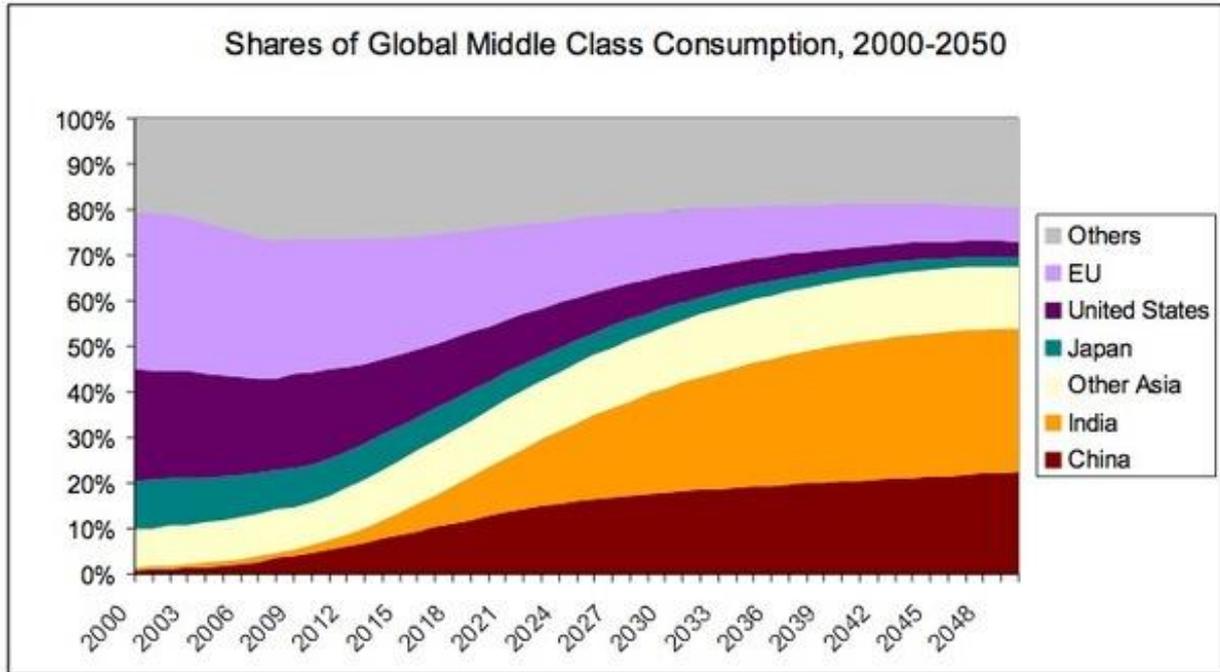
多くの生徒はいずれ企業で働くことになりますよね。私は「生徒の目の前のこと(勉強)に注力しすぎたり、一つ先のステージ(高校・大学進学)への橋渡しをしておしまいで良いのか?」と感じています。「これからの時代を生きる人材の育成」という観点から、生徒が働く時の社会について知って、どんなスキルが必要か考えてあげることが必要になってくるのではないかと考えています。

そういう意味では、このグループワークで行ったデータ分析の切り分けや数字の裏を読み取る力は生徒が働く時代に必要なスキルだと思います。また、中高生には多少生々しいかもしれませんが、企業の現場では、「業務改善力」「業績向上力」「新規事業開拓力」の3つが大きな要素になります。これからの社会を主体的に生きていく生徒を育てるために、これらのスキルや力を伸ばし、伝えていける教員がこれから必要だということも改めて感じました。

最後に、今回初めて参加させていただきましたが、皆さんに温かく迎えていただき、とても楽しく充実した時間を過ごせました。次回はどうしても参加できませんが、ぜひ今後も都合をつけて参加させていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

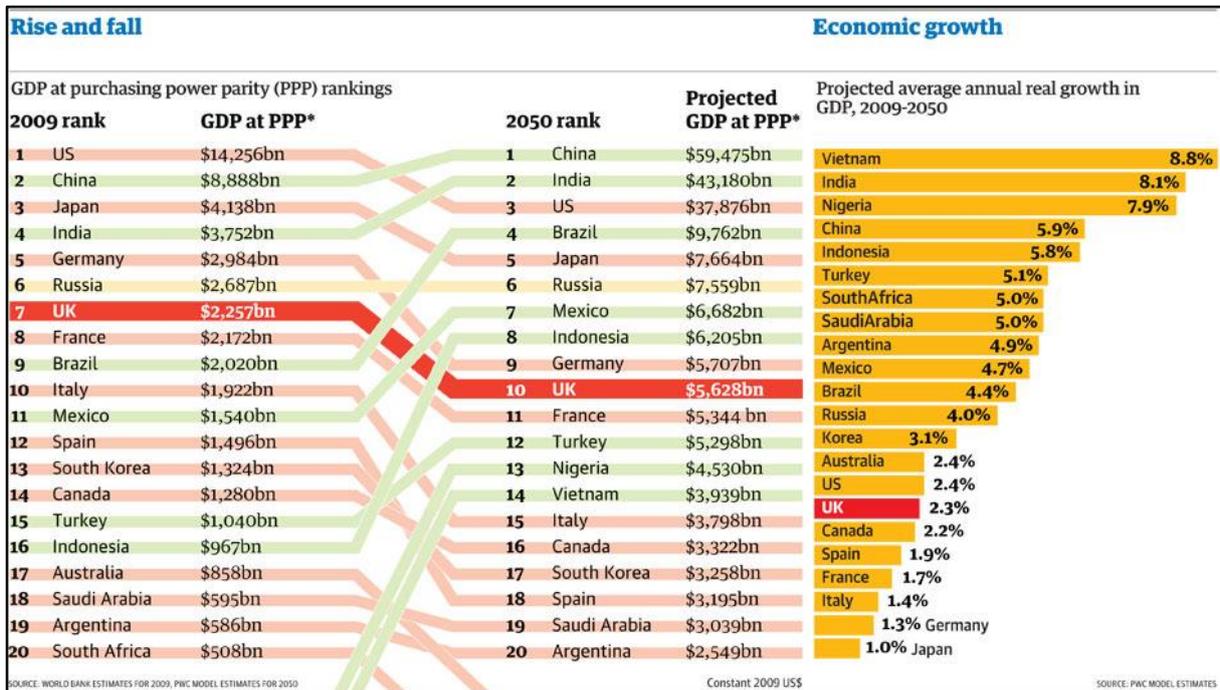
## E 卷末資料

### 資料 1



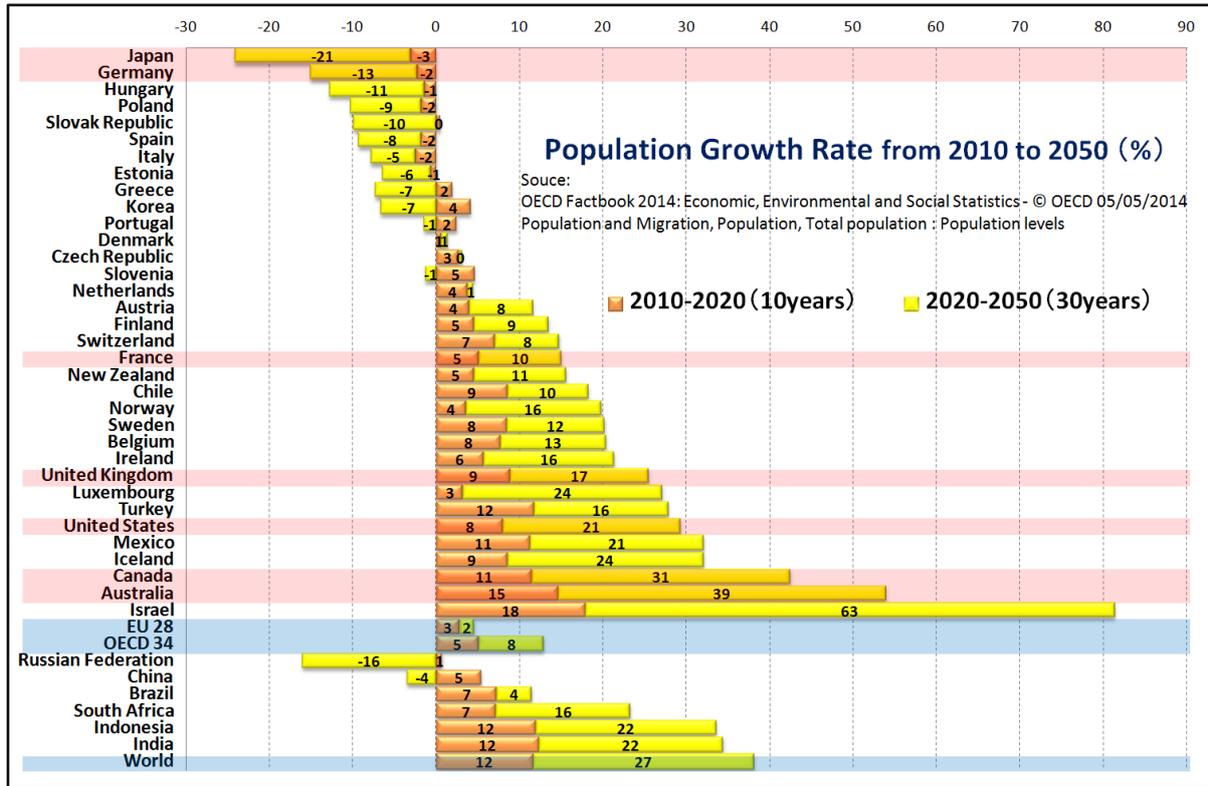
出典： Kharas, H. “The Emerging Middle Class in Development Countries.” OECD Working Paper, 2010.

### 資料 2



出典： Elliot, L. “GDP projections from PwC: how China, India and Brazil will overtake the West by 2050.” The Guardian. 2011.

資料3



出典：OCED Factbook 2014. 引用：小澤徹「先進国クラブ(OECD)の中の日本(人口と移住)」BLOGOS. 2014.